

認知症をわかりたい⁽⁸⁾

ある日の「講座」をのぞいてみた

協力：長野県岡谷市・共立福祉会

■認知症は全国に169万人存在し、20年後には倍増するとみられる病気です。認知症の人を見守れる人を増やそうという講座も各地でおこなわれていますね。このページでは、みなさんといっしょに、ある日ある場所でおこなわれた講座をのぞいていきます■

ピクニック日の巻(下)

私たちは認知症の方とどう接すればいいのか。その気持ちに一歩でも寄り添うには？ 身近にありそうな場面を、お芝居仕立てでご覧いただく「その5」です。前回にひきつづき、長野のグループホームのみなさんの協力です。

〈場面〉 認知症のお年寄りたちが生活するグループホームのピクニック。お昼も食べ終え、入所者の太郎さんたちが、施設へ帰る時間が来たようです。

職員A…ご飯も食べたし、帰りますよ。

太郎さん…昼ご飯、食べてないよ。

職員A…もう、嫌になるわあ。さつき食べたでしょ。ほらほら、さつきと帰る支度をしなきゃダメじゃ。

太郎さんの心の声…ピクニックなのに、お弁当を食べていないような気がするなあ。お腹もいっぱいじゃないよ。

職員B…どうですか太郎さん、楽しかったですね。

太郎さん…まだお弁当食べてないよ。

職員B…お腹が空きましたか？

太郎さん…うん。

職員B…これから帰って、おいしい食事しましょうね。

太郎さん…うん。

〈場面〉 ホームに戻って、夕方の時間
職員B…皆さんご飯ですよ。
太郎さん…食べたくないなあ。

太郎さんの心の声…なんだか疲れた。

職員A…まあ！ 「昼ご飯、食べてない」ってあんなに大騒ぎしたくせに。

職員B…まあ、まあ。きょうは皆さん

疲れているから、夕ご飯は少しゆつくりめに始めて、早く休みましょうね。

太郎さん、ピクニックは楽しかったですか？

太郎さん…うん、楽しかった。気持ち

がすーっと楽になるようだったよ。

職員B…それはよかったですね。

さつき食べたご飯を忘れたり、疲れ



寸劇をするスタッフたち

ほっと介護

89

やすかったり、太郎さんの言動は、認知症だからこそ起こることでした。

「いま」を共有するふたりの

それでも、認知症の人と「いま」の時間を共有することは可能。一緒に楽しんだり、悲しんだり、感動したりということとはできます。

また、「ご飯を食べた」「どこそこに行った」など、事実に関する記憶は失われやすいですが、「楽しい」「悲しい」などのイメージの記憶なら、残ることがあります。時にはそのイメージで、事実と違う話を頭の中で作り出し、それを現実のようにとらえてしまう「作話」といわれる症状も、これが原因で起きると考えられます。

認知症の人のお話は記憶が断片的で、間違っていることもあります。でも「楽しかった」という思いは、認知症でない私たちの感情と同質です。思いが共通していれば、事実の相違はそう重要ではない、そう考えてもよいのではないのでしょうか。

(参考テキスト)「認知症の人と家族が生き生きと暮らすために必要なこと」菅崎弘之